
You are fucking guy !

シンフォニー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

You are fucking guy!

【Nコード】

N4024T

【作者名】

シンフォニー

【あらすじ】

迷宮都市、グエンシティ。

命を捨てても金と名声を得たいなら迷宮へ挑めと言う格言がある世の中で、その言葉に従い数多の人間が集う場所。そんな都市にたどり着いたある男の物語。

主人公最強物です

第一話：始まり

迷宮都市、グエンシティ。

命を捨てても金と名声を得たいなら迷宮へ挑めと言う格言がある世の中で、その言葉に従い数多の人間が集う場所。

その都市の起こりは突如として人の前に現れた迷宮と言う名の遺跡から始まった。

いきなり現れた迷宮にはモンスターと呼ばれる怪物があり、そいつを倒せばお金やアイテムが手に入った。また、モンスターを倒さなくても迷宮を歩いていて信じられないような効果を持つアイテムが見つかったりもした。

だからこそ迷宮の周りに人が集まり、都市となった。

そして今、その都市の入口とも言うべき門の前に一人の男が立っていた。

頭髪は白一色で一見すると年老いた老人のようだが、よく見ると歳の頃は20代の半ばほど。全身もまた白一色でコーディネートされた衣服に身を包み、啣えタバコから紫煙を立ち昇らせるその姿は無駄に目立っていた。

「ここが、グエンシティか……」

男がボソリと呟く。

そこには感慨などの感情は一切こもっていない。彼にとってそれはただ事実を声に出して言っただけに過ぎない。

それが例え生家を出て実に三年の歳月を費やし辿り着いた土地であつても喜びなどは浮かばなかった。

男の名前はヴォイス。

故郷を離れ、迷宮都市にやってきた無法者の一人。

ただ、彼が迷宮都市にやってきた理由は他とは少しばかり違うか

もしれない。

彼が迷宮都市に来るに至った理由は故郷を追い出されたからだ。故郷を追い出され、行くところがなく彷徨っていた時にどんな者でも受け入れるという都市の存在を知り、やってきたに過ぎない。

そもそも彼が故郷を追い出された理由とは、彼の存在が化物じみていたからだ。

彼は赤ん坊の頃に故郷の村の村長の家の前で拾われた。故に誰が親なのか自分はおるか、育ての親の村長ですら知らなかった。

しかし、それだけならただの捨て子。故郷を追い出されるわけはない。

では、彼が故郷を追い出された理由を説明しよう。

とは言っても、彼が故郷を追い出された理由は先にも述べたように彼が化物じみていたことに起因する。

どのように化け物じみていたのか？

村長によって拾われ、ヴォイスと名付けられた赤ん坊は親の手がかりは全くなく、歳もわからなかったが、首が据わっていないかったため産まれて間もないと思われた。

しかし、拾われて一月後にはすでに言葉を発するようになり、その三日後には二足歩行をしてのけた。

そのことに多少驚きつつも、村長は子供を育て続けた。

そして赤ん坊が少年になる頃になると少年は大人の誰よりも速く駆けることが出来るようになり、その速度で一日中走っても息切れひとつしなかった。また十人掛かりでやっと持ち上げることが出来る荷物を一人で軽々と持ち上げることも出来た。

その当時ヴォイスは神の子供と言われ、村人達に持て離された。しかし、自分を見る視線の中に好意的なもの他に恐れなどの負の視線が混じっていることもわかっていた。

だからヴォイスは皆に好かれようと率先して村のために類い稀な身体能力を使って奉仕した。

だが、少年が青年になった頃に事件が起こる。それは所謂山賊の襲来だ。楽して生きるために他者の努力を掻っ攫う不貞の輩。その餌食となったのがヴォイスの育った村だった。村人達は渡せる物は全てを渡し、自分達の命を乞うたが、山賊達はそれを拒否し、交渉役に赴いた村長を無下にも殺した。育ての親を殺され怒り狂ったヴォイスは山賊達を皆殺しにした。そのおかげで村は山賊の略奪という魔の手から逃れたが、村人達がヴォイスを英雄としては見ることはなかった。

なぜ、もつと早く奴らを殺さなかったのか
村長を見殺しにした恩知らず
人殺し

村人は彼を責め立てた。
力では敵わないから遠くから口で……。
彼の姿を見かける度に、また見かけなくても家の前を通る度に……。
だから彼は故郷を出た。
彼が本当に尽くしたかったのは村ではなく、育ててくれた村長に
なのだから未練はなかった。
必要とされない以上村に居続けるのは苦痛だった。

旅に出たあと故郷の村が山賊に襲われ壊滅したと聞いた。なんで
もヴォイスが殺したのは山賊の先遣隊のようなもので、あの後に本
隊が襲撃したらしい。
だと言うのにヴォイスに生まれたのはざまあみろという感情だけ
だった。

「あれから大分経ったな……」

今度こそ感慨深げにヴォイスが呟く。

ここまで来る道中した色々な経験が頭をよぎる。ためになったものもあれば、くだらないものもある。

そしてそのくだらないものの代表格が口に啣えたタバコだろう。最初の一口目で直感的にこれが体によくはないものだと理解した。だが、今では無いと心細かったりする。ヘビースモーカーではない。一日一本でも吸えればいい。だが、吸わない日は考えられない。

「うし、行くか」

根本まで灰になったタバコを地面に落とし、踏み付けることで消火する。

そして門へ向けて歩を進める。

「ゲエンシテイへようこそ」

門番の男が中へと入ろうとするヴォイスへ向けて笑顔を浮かべながら言う。

ゲエンシテイは来るもの拒まずを信条とし、例えよその町で大量殺人を犯した犯罪者であろうとも何の審査もなしに入ることが出来る。

ただし、出るのはそう簡単にはいかない。

町の入口には常に門番が待ち構えているし、なおかつ高位の魔法使い百名から成る強力な結界が脱出を阻む。

出るには実質手続きを踏んで届け出を出さねばならない。その届け出を手に入れる唯一の方法が金だ。それも並大抵の額ではない。一般的な職業に就く者の生涯賃金に匹敵する額が都市を出るために必要なのだ。

故にゲエンシテイを蟻地獄と揶揄する者もいる。

その蟻地獄にヴォイスは今、自ら足を踏み入れた。

「さて、まずはどうするべきか……」

とは言ったものの、ヴォイスは自らがこの都市でどう生きていくかは決めている。迷宮を探索する。それ以外をしようとは思わない。旅の間に自分が常人よりも身体的に優れているのは村限定のことではないと確認した。ならば、それを活かそうと思ったのだ。

彼が持参している荷物は全くない。あるとすれば旅の途中で護身用にと購入した刀が一振り腰にくくりつけてあるだけだ。

その他のものは全て故郷に置いてきた。

「まずは宿か？」

ヴォイスは適当に初めに目に入った宿へと入る。

グエンシテイは迷宮探索者のための住居として宿の数が多い。その多くはただ眠るためだけにあるような宿だが、ヴォイスが入ったのは一階が酒場、二階から上が宿として営業しているわりと大きめの宿だった。

「とりあえず一泊頼む」

店員であるう恰幅のいい男に告げる。

それを受けて恰幅のいい男はジロジロと値踏みするようにヴォイスを見る。

そして一言

「探索者か？」

とだけ尋ねた。まだ迷宮に潜ったことのないヴォイスはその問いを否定しようとするが、どうせ後々そうなるのだから問題ないだろうと頷くことにする。

「なら連泊にしとけ。10日以上なら割引もある。それとも何か近いうちに死ぬ予定でもあるのか？」

「死ぬ予定はない。ただどこが糞忌ま忌ましい感じの宿なら違つとこ行くつもりだから、とりあえず一泊でいい」

宿というものは基本的に前払い制だ。

特に無法者や迷宮探索をしていて死ぬ者の多いグエンシティでは、宿代が未払いの事件が相次いだため宿代は前払いというのが義務化された。

しかし、余分に払われた宿代を返還する義務は設けられなかった。客が五日戻らなければ死んでるとして新たに客を入れてよい。そうでなくても契約日数を越えたら宿は新しい客を入れる。つまり宿としては客が死ねば回転率が上がり金も入る、と良いことづくめの法案だ。

7

ヴォイスは男から部屋の鍵を受け取るとそのまま部屋へと向かっていった。部屋の中は個室ではあるが、ベッドが置いてあるだけで窓もない狭苦しい空間だった。

正直野宿という無駄に開放的な空間で寝泊まりするのが普通だった生活をしていたヴォイスにとっては窮屈なことこの上ない。

「こりゃ、違う宿を探した方がいいのかな？」

ついつい愚痴がこぼれる。

ともかくにも外はまだ明るい。可能ならば早速迷宮とやらにも入ってみたいと考え、ヴォイスは部屋を後にする。

一階に降りるとヴォイスは先ほどの男に迷宮のことについて尋ねた。

「迷宮に入るための許可？ いらねえよ。なんだお前、初心者か？ 迷宮に関する決まりはそんなにないんだ。あるとすれば持ち帰ったアイテム類なんかは鑑定所以外には売ってはならないってことくらいだ」

「それだけか？」

「ああ」

念押しするようにヴォイスが尋ねるが、男は頷くだけでそれに答えた。

その後は鑑定所のことを聞いてみた。すると行けばわかると行ってほしいの場所だけ教えてもらった。男の話では鑑定所はいくつもあるとのことだ。

ならば行ってみようではないかとヴォイスは思い、鍵を預けて宿を後にする。その胸のうちには接客態度の悪い宿に見切りをつけて新たな宿を探すことも視野に入れていた。

歩いていると鑑定所とかかれた看板が目に入り、そこに足を踏み入れた。

鑑定所の中は大玉の水晶を前にして椅子に腰掛ける老婆の姿があるだけだ。

「いらっしやい」

しわがれた声で出迎えられる。

「いや、特に用事はない。売れるようなアイテムも持ってねえし…」

「ヒエツヒエツヒエ、んなもん見りゃわかるわい。じゃが売れるもんがないんじゃない？ たらお前さん自身を鑑定せぬか？ お代は安くし

とくですよ」

「いくらだ？」

「二千G^ガじゃ」

自分自身を鑑定と言つのはよくわからなくはあつたが、戯れにやってみようと思つたヴォイスでだったが、提示された額に少し躊躇が生まれる。

それもそのはず、老婆が提示した額は普通戯れだと言つて使うには少々割高だ。ヴォイスの価値観では少なくともタバコが四箱買える。

「……ほう、お前さん自分自身の鑑定は初めてなんじゃな？ 武器を持つとるから探索者と思つたが初心者さんかの？ ならばやつたほうがあええ」

老婆の言葉に促され、ヴォイスは金を支払う。そもそもこの金もヴォイス自身が働いて得た金とは言い難い。グエンシテイに向かう道中に蔓延る賊を殺して奪ってきたものに過ぎない。手放すと決めたら躊躇はいらなかつた。

「では、水晶に手を置いてくれい」

ヴォイスは水晶を上から掴むように右の手を置く。

それを確認すると老婆は水晶に手を翳し、ぶつぶつと呪文を唱えだす。そしてそれに呼応するかのごとく水晶が光を発し始める。

目を瞑るほど強烈なわけではなく、月の光のような優しい輝きが納まると右手の甲にかなり複雑な紋章のようなものが描かれている。

「これは？」

「それはお前さんの総合的な強さを表してある。精神の強さだった

り肉体的な強さだったり。紋章が複雑なほど強いとされておるんじやが……ふむ、これはワシも見たことないほど複雑じやのう。こりゃ相当な強さじゃ」

老婆の感心したような声を他人事のように聞きながらヴォイスは右手に刻まれた紋章を見つめる。すると紋章がすうーっと消えていった。

「……消えた」

「一過性の魔法じゃから、そりゃ消えるわい。また見たかったら三千Gじゃ」

「おいババア、値段上がったんぞ」

「最初のはサービスじゃと言ったろっ」

「ちっ、まあいい。ためになった。迷宮に入って得たアイテムはここに持ってくりゃいいんだよな？」

「そっだよ、売っていいのは鑑定所だけさ。手に入れたアイテムを自分で使う分には規制はないけどね」

「罰則でもあんのか？」

「よくわからないけど、噂じゃ相当酷い目に遭うらしいよ。氣い付けな」

老婆の言葉に頷くとヴォイスは鑑定所を後にする。そして一路迷宮へと足を向けた。

第二話・いざいざ

「モンスターと聞いて少し期待していたが、こんなもんか……」

残念そうにヴォイスが呟く。

現在ヴォイスは上下左右を石畳に囲まれた通路をひたすら適当な方向へと歩いている。そこは迷宮と呼ばれる遺跡の地下一階部分。

モンスターの闊歩する迷宮をヴォイスはなんでもなないように歩いていた。

もちろん彼に対してモンスターが襲ってこないということはない。現にヴォイスは腰にぶら下げている刀を抜き去り、右手に持ちながら周囲を警戒している。

しかし、モンスターという存在はヴォイスにとって警戒をするに値しても危機感を持つに値する存在ではなかった。

彼にとって噂に聞いたモンスターとは真正銘の怪物、つまりは化け物であった。それと比べたら自分などは化け物と呼ぶ価値はないような凄惨な存在。

だが実際はどうだ。

襲い掛かってくるのは本能剥き出しで気配も消していない。また、間合いに入れば刀の一振りですぐ簡単に死んでしまう脆弱な存在だった。これのどこが怪物と呼べるのだろうか。

これなら道中に殺した賊の中でもっとマシに戦える奴がいたとヴォイスは今まで殺してきた男達を思い出す。しかし、それはマシと言える程度で、ヴォイス自身に傷を負わせた存在はいない。

その白い衣装は誰からも傷を付けられず、また、誰の返り血も浴びることはなかった。

迷宮内でもそれと変わらない現象は起こっていた。

ウルフと呼ばれる狼が狂気を増し、理性を失った生き物とドラゴ

ンフライという六枚羽の体長一メートルほどの昆虫のようなモンスターが数匹まとめてヴォイスに襲い掛かってきた。

だが、それにヴォイスが慌てることはない。モンスター達が群れで襲い掛かってくることは気配であらかじめ察知していたし、なによりも数が集まろうと脅威ではなかった。

冷静に一匹ずつ近寄ってきたモンスターを一刀のもとに両断する。そこに慈悲など存在しない。あたかも作業のようにヴォイスはその動作を繰り返した。

「もう、いないな？」

気配は感じずとも、一応声に出してヴォイスは辺りを確認する。

そして辺りに何もいないと確信するとモンスターが落としたであろうものの回収作業に入る。

ヴォイスが倒したモンスターはいつのまにか消え失せ、モンスターの死体があったであろう場所にはいくつかの硬貨と草のようなものが落ちている。

この硬貨は全て同一で、エクセリット銅貨というものであり、広く一般に流通している。その価値は100Gほどではない。これがモンスターを一匹倒すごとに一枚ずつ。ヴォイスにとっては通算六十を超える銅貨が手に入ったことになる。また、それ以外にもランダムでアイテムが手に入ることもある。今のところヴォイスが手に入れたのはそこらに自生してそうな草しかないが、モンスターを倒した後に残ったのだからそれなりのものだろうと一応回収している。

「そろそろ袋がやばいな」

ヴォイスは自分の財布とも言える袋を確認してそう呟く。その袋はあまり大きいと言えるものではなく、精々りんごを一つ入れれば

いっぱいになってしまいうくらいでしかない。そしてすでに九割はエクセリット銅貨でいっぱいになっている。

彼は今回迷宮に挑むに際して別段なにも準備というものをしていない。着の身着のままという感じで迷宮に入った。

本来なら装備を整え、ヒールポーションという回復薬や解毒薬、麻痺緩和剤などといったアイテムの他にマッピングのための道具など迷宮に挑むためには多くの準備が必要だ。それを怠れば死という運命に一直線で進む所業である。

だというのにヴォイスはそれをしなかった。というのも今までそうだったアイテムを使用したことがないため、そういう物があることを知らなかったからだ。

だが、結論からいえば今回の迷宮探索においては必要なかったといえよう。地下一階には毒や麻痺といった状態異常を引き起こすモンスターは存在しなかったし、ヴォイスは自分の歩いてきた道のりを記憶し、歩数から距離までも計算して頭の中に地図を描くといった通常では考えられないようなことを平気でやってのける能力があった。

「戻るか……」

ヴォイスは頭の中の地図を起こして出口までの最短ルートを確認して走り出す。

別に急ぐ必要があるわけではないが、無駄に戦うのが面倒だったため、道中に存在するモンスターを無視するために足を速めた。相手がこちらを知覚する前に通り抜ければ問題ない。そう思っただけの行動だった。

結果はヴォイスの予測通り六割ほどの速力でモンスター達はヴォイスの存在を知覚できなくなった。

そのスピードのまま二時間はかかる道を十分ほどで走ると迷宮の出口が見えてきたので、スピードを歩くペースまで落とす。ちなみ

に歩けば二時間はかかるであろう距離を十分で走り抜けるということとはどういうことかは推して知るべし。

そしてヴォイスはそのまま迷宮から出ようとした。

「なんだあ？ 地下一階の方から人が出てきやがった」

人を小馬鹿にしたような声音で声がかけられたのは迷宮の入口でもあり出口でもある迷宮一階エントラスに足を踏み入れた時だった。ヴォイスが声のした方向へと目を向けると下卑た笑いを浮かべながらヴォイスを見つめる三人の男達がいた。男達はそれぞれ軽鎧、重鎧、ローブに身を包んでいる。風体から見て探索者、それもおそらくはパーティーといった多数で協力して迷宮探索を行う者達だろうと推測したヴォイスは男達を意識的に無視して遠ざかるうとする。

「いやあゝ、こいつ装備もくそもねえぜ？」

「大方、ビビって逃げてくる際にどこかへ落としてきたのだろう」

「まっさかゝ地下一階で？ ありえないっしょ」

その場を去ろうとしたヴォイスの邪魔をするかのごとく前方に立ち塞がった男達はヴォイスの姿を見ながら憶測でものを話しはじめる。

「ま、最初は誰でもそうなるさ。おれらは違っただけど……ケヘッ」

軽鎧の男が笑いを堪えきれないとばかりに笑い出す。

「おいおい笑ってやるな。いくらなんでも失礼だぞ。例え地下一階で苦勞する者など至極珍しいことでもな」

重鎧の男が軽鎧の男を諫めるように注意しているが、そう言いながらも男の顔にも人を見下したような笑みが張り付いている。

「どいてくれ」

努めて平坦な声でヴォイスが道を空けてくれるようお願い出るが、聞こえないのかはたまた聞こうとしていないのか男達にどく気配はない。

「邪魔だ」

今度は言葉を変えて道を空けるよう言った。すると今度は聞こえたのか男達は会話を止めてヴォイスの顔を見つめる。

「今、邪魔だつつつたか？ 初心者ごときがおれらに対して邪魔？」
「わたしにもそう聞こえた。どうやら空耳ではなかったらしい」
「生意気っしょ。やっちゃう？ 迷宮探索の先輩として示しつけとく？」

どうやらヴォイスの邪魔発言がカンに障ったらしく、臨戦体勢になつて男達はそれぞれの武器を抜く。

軽鎧の男は片手剣を、重鎧の男は大きな斧を、そしてローブの男は杖を構えた。

意味もなく絡まれ、挙げ句の果てには武器を向けられたことに内心苛立ちを覚えながらも旅路の中での賊との絡みでこつこつ手合いにはだいたい慣れてしまったヴォイスはひそかに溜め息を吐く。

こつこつ奴らが人に因縁を吹っかけるのに大きい理由はない。要は自分を強く見せたいだとかただ単に人をナメてるだとかくだらないものばかりだ。

だが、くだらない理由しかないだけに対処法は簡単だ。潰してし

まえばいいのだ。二度と自分に言い掛かりをつけてこないよう徹底的に。

「ぐえっ！」

ヴォイスは一瞬でローブの男の間合いに入ると右手で喉を締め上げる。格好からいって十中八、九この男が魔法使いであり、呪文を唱えられると少しばかり厄介であるから一番最初に潰すことにした。

「て、てめえっ！」

「そいつを離しやがれっ」

他の男達の声に反応し、視線を移しつつも右手の力は緩めない。それどころか徐々に右手に込める力を強める。そうしているとローブの男の顔色が青紫になっていき、ついには白目を剥く。

(落ちた)

それと同時にローブの男を軽鎧の男に投げつける。全力ではなかったとはいえそれなりの力でもって投擲したそれは軽鎧の男諸ともエントラスの壁にまで吹っ飛んでいき、ピクリとも動かなくなる。

「え……あ、よ、よくもやってくれたな」

残ったのは重鎧の男一人だが、ヴォイスのやった所業に啞然としながらも武器は依然ヴォイスに向けたままだ。だが、その腰がひけてしまっているのは仕方ないことだろう。一分もしないうちに瞬間に自分以外の仲間達がやられてしまったのだ。本能でも理性でもすでに目の前の男には勝てないと告げていた。だからと言って逃げれば仲間達に申し訳が立たない。重鎧の男がヴォイスに向かっているのは、もはやそれだけの理由だ。

「刺殺、絞殺、撲殺、好きなものを選んでくれ」

ヴォイスが妙に優しい声で男に話しかける。殺す気は一応ないが、今は心に恐怖という種を蒔くために出来るだけ心に残る倒し方をしようという画策中である。

「そこにわたしの勝利という選択肢を入れておけっ」

重鎧の男がヴォイスに飛び掛かるが、重量を増すことで防御力と攻撃の破壊力を増した男の装備ではその動きはひどく緩慢だ。

少なくともヴォイスには止まって見えていた。

「なっ」

重鎧の男は気付けば自分の顔を掴まれていた。メキメキと顔の骨が音をたてているのがわかる。そして指の隙間から見える景色がゆっくりと前へ流れていくのが見えた。

(よくわからんが、負けたんだろうな……絡む相手を間違えた……) そんなことを考えたのを最後に男の思考はブラックアウトした。

重鎧の男を気絶させ、ヴォイスは服についた埃を手で叩いて払う。重鎧の男を倒した方法はただ単に顔を握って壁まで運んでたたき付けるといった単純なものでありながら、破壊力は抜群だった。見ればエントラスの壁には大きなひびが入ってしまったている。

「ま、いつか」

自分に絡んできたあいつらが悪いと結論づけてヴォイスは倒した男達の懐を漁る。

しかし大した持ち物は見つからない。財布すらないのはヴォイス

にとつても意外だった。仕方ないので彼らの身ぐるみを剥いで持っていくことにする。

「こんなもんかな」

お情けで下着は残しはしたものの、一仕事終えて良い仕事をしたという感じでヴォイスがいい笑顔を見せる。賊を倒して日銭を稼いでいたヴォイスにとつて彼らの装備を剥ぐことは迷宮探索よりもよっぽど仕事をしたという実感が持てた。

唯一の気掛かりは腕につけたブレスレットが取れなかったことだ。三人でお揃いのもものをつけていることから、よっぽどに仲が良いのだらうと考える。壊して持つていくことも考えたのだが、先ほどの戦いでヴォイスの存在はエントラスにいた人々の注目の的だ。装備を剥いでる今もヴォイスのことを鬼だと若干引いたような声でヒソヒソと囁き合っている。

これ以上の悪目立ちは好ましくないとヴォイスはその場を後にしようとする。

「待ちなさいっ!」

と若い女の制止の声が聞こえてヴォイスは足を止める。

そして声のした方に顔を向けると、遠巻きにヴォイスを見ていた一団を掻き分けながら蒼い人影がこちらへ向かって来ているのが見えた。

「……や、やっと抜けた」

人影はようやくやく集まっていた一団から抜けると両手を膝について呼吸を整える。

それは見目麗しい女性の戦士であった。透き通るような長い水色

の髪に蒼き甲冑に身を包んだヴォイスと同じかそれよりいくらか年下の女。背には彼女の体と同じくらいの大きさの大剣を背負っている。

そして、女は呼吸を整えると睨みつけるかのようにヴォイスの顔を見つめ、そして視線をずらして下着一枚にひんむかれた男達を見た。そして視線をまたヴォイスに戻すと同時にビシッと指を突き付けた。

「あなた、やり過ぎっ」

それがヴォイスとアリアの出逢いだった。

第二話・いぢぢぢ（後書き）

物価はだいたい日本と同じと思ってください

第三話：腕輪

いきなりの女戦士の物言いを眉一つ動かすことなくヴォイスは受け止める。やり過ぎと言われた行為についてはヴォイス自身にも覚えがあった。しかし、見知らぬ女戦士に指を差されてまで指摘される覚えはなかった。

「人様に指を差すな」

不機嫌を装って女戦士、名前をアリアという女性に注意してやる。その言動にカチンときたのかアリアがヴォイスに対する視線を強める。周りがそれを受けて、ヴォイスがまたなにかするのではという好奇と不安に満ちた目で見つめる。

「そんなどうでもいいことより先に彼らから奪った装備を返してあげなさいよ。正直言っただの毒だわ」

アリアの言葉にヴォイスが首を傾げる。ヴォイスの中でアリアのやり過ぎと言った行為とはエントラスの壁にひびを入れたことであった。しかし、アリアはヴォイスが戦って勝ち取った戦利品を返してやれと告げた。なぜだろうとヴォイスが考えていると不意にアリアの右手首に倒した男達と同じ腕輪が着けられているのが見えた。

「なるほど……お前はこいつらの仲間ってわけか……」

そう理解するとヴォイスはすたすたと不用心にアリアへと近づいていく。別段アリアに何かされたわけではないが倒した男達の仲間である以上見逃してやる理由も特にない。今までも賊の中に女が紛

れていたことはあつた。その時に対処法を変えたことはない。

それは故郷の村でヴォイスが暮らしていた頃、普段男女平等を訴えるくせに土壇場になると自分の女という性別を引き合いに出す人間がいたことが理由だ。村の人間に好かれようといいい奴を装っていたヴォイスはこの女に対してでも優しくしていたが、ヴォイスを村から追い出そうと一番に騒ぎだしたのはこの女だった。曰く、『この化け物は村長が死んで枷が外れるのを待っていた。そして人間離れた力で自分達を犯そうとしている』と。もちろんヴォイスにそんなつもりはさらさらなかつたし、この女に対しては大金を積まれてもそんな気を起こすことはなかつただろう。しかし、普段なら戯れ言で済まされる言葉も村長が死に、山賊を一人で皆殺しにしたばかりのヴォイスに対しての恐怖や怒りが最大限にまで高まっていた村人には効果絶大だった。

それからヴォイスは例え女であろうと男と区別しないことを意識的にやってきた。

女だからといって優しくしてもらくなくなることにならない。これまでの経験を教訓にしたヴォイスの精神の帰結だ。

「ちよつ……なんで近づいてくんの？ とゆるか仲間ってなに？」

自然な動作で自分に近づいてくるヴォイスになぜかわからない恐怖を覚えたアリアはヴォイスの言動に対しての疑問をぶつける。

「しらばっくれるな。お前の腕輪、あいつらの着けてたやつと同じだ」

「これ？ いやいや違う。違うよ？ これは銀行の個人認識証だから。あたしはそいつらと無関係」

そう言ってアリアは自身は男達と関係ないと全身を使ってアピールする。

「銀行？ 下手な言い逃れを……」

田舎暮らしが長く、旅の途中にも銀行なんてものを見たことのないヴォイスにとってはアリアの言葉は言い逃れをしているようにしか思えない。

「あんた初心者かよ！ この都市には一日で大金稼ぐ奴がいるから金を預ける場所があるのっ！ これはそれを引き落とすのに必要な物。あいつも、そいつも、こいつも皆着けてるでしょっ！？」

そう言っただけアリアが、近くにいた人間を次々に指差す。指差された人間達はいきなり指差されたことでビクリと反応したが、ヴォイスの視線が自分に向くと自分達の腕輪を見せる。

「全員で俺を罠に嵌めているという可能性がある以上信じるわけにはいかない。とりあえず腕輪着けてる奴は全員、そこに転がってる奴らと同じ目に合わせることにする」

「どんだけうたぐり深いのよっ！」

アリアのツッコミはヴォイスの言葉の後に生じた音によって掻き消えてしまう。

それはヴォイスが男達を制圧する過程を見ていた者達が我先にと逃げ出す音。ヴォイスの実力を垣間見て自分も剥ぎ取られるのを恐れて出来るだけヴォイスから離れようと迷宮の外を目指した。逃げ出すそぶりを見せなかった者はアリアを含めて数人しかいない。自分の実力に自信がある者、また、腕輪を着けていない者、ヴォイスの実力を見ていない者など各々理由は違うが、皆エントラスのあまりの混乱状態に目を丸くしている。

「逃げるってことは、やましい気持ちがあるんだな」

そしてこんな状態になって、目を丸くするどころかやる気に満ち溢れた声を出す男が一人。ヴォイスの目はいつの間にか狩る者のソレになっている。

「なんでこうなってんのよっ!」

そして混乱からいち早く抜け出たアリアは猛然とヴォイスに向かって走り出す。それは混乱の元凶を押さえるため。元々ヴォイスの方からアリアに近づいていたため、距離は近い。捕まえるのは容易に思えた。

「いい加減に」

しかし、ヴォイスを掴もうとした手は虚空を掴む。アリアが驚いて目を見開くとそこにヴォイスの姿はなく、迷宮と外を繋ぐ場所にその姿があった。

「いつのまに……」

アリアのつぶやきに答える声はない。

「腕輪を着けてない奴は通っていいぞ。それ以外はとりあえず眠ってもらおう」

そしてエントラスの出口ではヴォイスによる理不尽な暴行が始まるうとしていた。

「って、待ちなさいっ」

そこにヴォイスが消えたことに茫然としていたアリアが戻ってくる。そして猛然と人混みを掻き分けてヴォイスの元へと近づき、その腕を掴むと無理矢理外へと引っ張っていく。

「通ってよし」

そして背後にそう告げるとヴォイスの手を掴んだまま街の中へと消えていった。

ヴォイスは悩んでいた。それは今自分の腕を掴んでいる女を払いのけるかどうかではなく、男達を倒して奪った戦利品を置いてきてしまったことでもない。彼が悩んでいるのは手を引かれるという行為に不快感なく、素直についている自分自身に対してだ。

（誰かに手を引かれるなんてラメント以来だ）

ラメントとは彼の育ての親であり故郷の村の村長でもあった男の名前だ。人に優しくしたヴォイスは、人に優しくされたことはほとんどない。彼に優しさを与えた数少ない存在のうち、最も多くの優しさを授けたのがラメントだった。

そんな風に優しさに触れてこなかったヴォイスがただ手を引かれたというだけでそれを振り払えなくなってしまうことを悩んでしまうのは間違いではないはずだ。例えそれが優しさから生じたものではなく、騒ぎの元凶を現場から離すというアリアの何も考えずにだした行動であるとしてもだ。

「どこ行くんだ？」

今の状況に気恥ずかしくなり、ヴォイスが手を引いて自分をいずこかへと連れていくアリアへと尋ねる。

「へ？ ああ……、考えてなかった」

ヴォイスに話し掛けられて、たった今状況を知ったとばかりにアリアが足を止めて考え込む。しかし、その手はヴォイスを掴んで離さない。

「なら、銀行とやらに連れていけ。お前の話が本当かどうか確かめたい」

「そ、そうね。こっちよ。ところであんた、奪い取った装備は？」

「置いてきた」

「そう……いい？ 追いはぎは犯罪なの。例え先に喧嘩を吹っかけたのが相手だとしてもやっっちゃいけないことなのよ？」

ヴォイスの手を引いて銀行へと向かう道を歩きだしたアリアは年下の兄弟にでも諭すかのような口調でヴォイスに語りかける。それを聞いてこの女性がただ正義感から自分に対して話し掛けてきたのだと思いつつもヴォイス自身解せないことがあった。

「てつきり壁を壊したことを怒ってるんだと思っただが……」

「あんなものは、しばらくしたら直ってるわよ。あの迷宮が現れて何年経ったと思ってるの？ 三百年よ、三百年！ その間にあんたみたいに壁を壊した奴がいなくても思ってるの？ まあ、いたんだけど次の日には綺麗に直ってたみたいよ」

不思議なものよねとアリアが呟く。なんのために生まれ、なんのためにモンスターがおり、なんのために数々の不思議なアイテムが迷宮内で手に入るのか。研究している者は歴史の中に何人もいるが、

その原因を突き止めた者はいない。だが、迷宮が生み出すものは人々の暮らしに恵みを与えた。

「ところであんたの名前は？」

「ヴォイス」

人に名前を聞かれたのは久しぶりだが、淀みなく答えられたことに若干の喜びを感じ、人知れずヴォイスはにやける。

「あたしはアリア。ソロで迷宮に潜ってんのよ」

そのことに気づかずアリアは自身の自己紹介をする。

「あんた最近グエンシテイに来たばっかよね？」

「なんでわかる？」

「いや、銀行は知らないし、なにより三馬鹿に絡まれたみたいだし……」

アリアの口ぶりからして三馬鹿というのはヴォイスがのした三人のことで、初心者に絡むような狡い奴なのだろう。

「なら、悪いのはどっちかわかるだろ？」

「うん……だけど他人の装備を奪うのはルール違反。自分の装備は自分の力で手に入れるの。それがこの街のルール」

そんなアリアの言葉に倒して手に入れたんなら自分の力で手に入れたんじゃないかと口走りそうになったヴォイスは寸前で口を閉ざす。

屁理屈を言ってもしょうがない。

「さてと、着いたよ。ここが銀行」

アリアが足を止める。そこは周りの建物よりも一回りも二回りも大きな建物の前。シックな色合いでグエン銀行と書いた看板がある。その建物は日が傾きかけた時間帯でも活気が見えた。それこそ看板がなければ夜の酒場と間違っくらいに活気に満ちていた。

「今の時間はちょうど迷宮に潜っていた人達が帰ってきてお金を預けにくる時間だから混んでるのよ。でもまあ、ご新規さんは空いてると思うわ。行く?」

アリアの問いにヴォイスは頷く。それを受けてアリアはヴォイスの手を引いて銀行の中へと入っていく。

銀行の中は多くの人で溢れていた。そしてそのほとんどが、汗くさい人間で構成されており、中へ入ると臭気と熱気でむわっとしたものが、ヴォイスの鼻をついた。

「あ、やっぱり空いてる」

そう言っアリアに引つ張られてたどり着いたのは新規参入者受付と書かれた札のあるところに並んだ列の後ろ。他の列と比べると明らかに並ぶ人数は少ない。

ほどなくしてヴォイスの順番が来た。

「いらっしやいませ。ご新規様ですね。まずはお名前などの必要事項をこの用紙にご記入ください」

受付に指示された通りにヴォイスは紙に必要事項を記入する。この世界の識字率はそれほど高くない。現に故郷の村ではそれほど字を読み書きできる者がいなかった。ヴォイスが読み書きできるのは

養父であるラメントが数少ない読み書きできる人間だったからに他ならない。それ以外の家の子供は読み書きを勉強する暇があるなら家の仕事の手伝いを強要されていた。

だが、銀行を使用できるのは最低限、字の読み書きが出来るくらいには学がなくてはいけないらしい。ヴォイスはここにきて更に養父に感謝することになった。

「はい、結構です。少しお待ちください……………お待たせしました。では、最初にいくらか当銀行に預けて頂ける金銭がありましたら私に渡して頂けますか？」

その言葉にヴォイスは袋からアイテムとして拾った草を抜いて全部を受付の前へと置く。

「それでは数えますのでお待ちを……………あと、これに一滴でいいんでお客様の血をかけてもらえますか？ 刃物がなければ唾液でもいいんですけど、その場合コップ一杯分は必要ですんで……………」

そう言っ受付がヴォイスの前に置いたのは三馬鹿を始めアリア等が身につけていた腕輪。だがしかし、アリア達の身につけているものとは色が違う。アリア達の真っ赤な腕輪とは違い、ヴォイスの前に置かれたのは白い腕輪だ。

そのことに若干の引っ掛かりを覚えつつも腰にぶら下げた刀を少し抜いて親指を軽く傷つけ、血を滴らせながら腕輪の上に手を置く。よく見れば受付の台の上はいくつもの血の点があることから皆同じようにしたのでだろうとヴォイスは内心思う。

そしてヴォイスの血が腕輪の上に一滴落ちると腕輪の色が徐々にアリア達の物と同じく真っ赤に染まっていく。

「はい、これでこの腕輪はあなたの生態情報を取り込みました。も

はやあなた以外には使えません。と言っても当銀行の者は扱う術を知っていますけどね。ですが、悪用することはございません。あくまで、お金のお預かり入れや引き下ろしの際に必要な技術なんです。あとは……預けていただいた金銭の集計も終わりました。あなたの口座に計上しましたので、腕輪を着けて残高をご確認ください」

受付に促されるままに腕輪を装着したヴォイスであったが、どうやって残高を確認すればいいのかわからず固まってしまおう。

「腕輪に向かって残高照会と云えばいいのよ」

それまでヴォイスの後ろで成り行きを見守っていたアリアが助言する。ヴォイスがその通りにやってみると腕輪に数字が浮かんでくる。

「腕輪は使用者本人でないと取り外しができません。また、クレジット機能も備えておりますので、この都市のお店でのお支払いの際にご提示くだされば自動で口座から引き下ろされます。ただ、この都市限定の品ですので他都市に赴く際はご使用できない旨をお伝えしておきます。以上で説明は終わりです。ご質問はありますか？」

「いや、今のところない。もしあったらこいつに聞くからいい」

そう言っつてヴォイスは後ろのアリアを顎で示す。

「いや、あたしは……」

「んじゃ」

アリアが何か言おうとしたのを遮って、今度はヴォイスがアリアの腕を掴んで外へと繰り出す。

「疑って悪かった」

銀行を出て早々にヴォイスはアリアに対して頭を下げる。謝罪の理由はもちろんアリアを三馬鹿の仲間だと言ったこと。ここまできて疑いが晴れないことはないし、自分が悪いと思ったことで謝らないほどヴォイスは愚かでもない。

ただ、自分が間違っていないと思っただら意地でも謝らないし、実力行使でわからせることにも躊躇いはないが……

「ん、まあ誤解が解けたんならいいよ。それより、あんたさつきわからなかつたらあたしに聞くとか言っただけ……」

「お詫びに飯でも奢るよ。ついでにオススメの場所があるなら案内してくれ」

「……はあ、わかつた有り難くゴチになります。ついてきて」

そう言っただけでアリアが歩き出すとヴォイスは掴んだ手を離してアリアの後についていく。しかし、数歩歩いたところでアリアは立ち止まり、ヴォイスの方を向き直る。そしてヴォイスの腕を掴むとまた前方を向いて歩き出す。

その不自然でありながら、やけにしっくりきたアリアの行動にヴォイスが首を捻っている

「なんかあんた迷子になりそうだから。なんかあたしゃ、いきなり弟が出来た気分だよ」

前方を向きながらアリアがそんなことを呟いた。その言葉に密かにヴォイスも同意してしまっていた。

第四話：酒に飲まれた男

明くる朝。

目を開けるとともに襲ってきた猛烈な頭痛にヴォイスは目を覚まさなければよかったと若干の後悔を覚える。次いで胃から何やら酸っぱいものが迫り上がってくるのを飲み込んでその後味の悪さに顔をしかめる。

二日酔い。世間一般にそう呼ばれる症状にヴォイスは陥っていた。一体どれだけ飲んだのか記憶が定かではない。

立ち上がるのも億劫なヴォイスだったが、無性に喉が渴いたので手に入れようと立ち上がる。ヴォイスの記憶が確かならば宿の部屋はベッド以外に何もないような空間だった。水を貰うには下の酒場へ行って貰わねばならない。

しかし、そこでヴォイスは部屋に違和感を覚える。ひどい頭痛に襲われて思考することが億劫であるにも関わらず、周りを見回して確認をする。

部屋はヴォイスが金を払って宿泊の旨を伝えた部屋とは明らかに違った。窓があり、陽光が部屋内に対して差し込んでいることを始めとして、四倍は広さが違った。

ベッドしかなかった部屋の調度品にはテーブルと椅子が増え、また、簡易ながらもキッチンらしきものもあつた。

どうして自分がこの部屋に泊まることになったのか一切記憶がないヴォイスにとっては魔法をかけられたみたいなので、呆然とするしかない。

それでも痛む頭を押さえながら必死に何があつたのかを思いだそうとした時、ある一人の人物を思い浮かべる。

その人物こそ、アリアと言う女戦士でありヴォイスがどうしてこんな状況になっているのか知る唯一の手がかりみたいなものだ。

しかし、それでもとヴォイスは考える。

(アリアとは色々とお話した記憶があるけど、なんも覚えてねえ……
……) しいて言うなら歳が俺よりひとつ下だったことくらいだ。つーか
どうやって連絡取ればいいんだ？ いや、そもそも朝起きたら別の
宿に泊まっていたことなんて特に不都合はねえな。まあ、最初に払っ
た金が全くの無駄になったのは悔しい気もするが……)

そう結論つけてヴォイスが立ち上がる。せつかくキッチンがある
のだから、水を飲んで少しでも気分を良くしたかった。

「う、ん……」

ヴォイスが立ち上がって数秒のタイムラグの後、背後から聞こえ
てきた声にキッチンへ向けて一步を踏み出そうとしたヴォイスの動
きが止まる。二日酔いだっただとはいえ、すぐ近くに誰かが潜んでい
ることに気づかなかったことに激しく後悔しながらすぐにとるべき
行動に移る。

背後にいる潜伏者の正確な気配を探ると同時に出来るだけ離れ、
武器になるものを探しながら様子を伺う。ヴォイスは並大抵の輩で
あるならば素手で制圧できる自信がある。しかし今の今まで自分に
察知できないほどに気配を絶っていた相手に対してもそう過信する
ほど自信過剰ではなかった。

潜伏者が居るのは先ほどまで自分が眠っていたベッドの近くだ。
いや、近くと言うよりベッドの中だった。

ヴォイスが抜け出たためにめくれあがった掛け布団の裾から、白
い足が見えている。ムダ毛もなく、シミもない細い足の爪にはペデ
ィキュアで手入れもされている。一目でこの足の持ち主が女だとい
うことがヴォイスにもわかる。

知らない部屋、記憶がない自分、隣で寝ていたであろう謎の女、
そして何よりヴォイス自身初めて自分が衣服を何も纏っていないこ
とに気づく。ここまで来れば大体の大人はある仮説に辿り着く。

「……やっちゃたか？」

そう言っただけの昨夜のことを思い出しながらベッドに近づいていく。起きぬけに胃の内容物を戻しそうになっただけのために嗅覚の機能が低下していたのだろう。機能の一部が回復したヴォイスはベッドに近づくと度々情交の臭いが濃くなっていくのを感じ取る。

「やっちゃったよ、おい……」

ここまでくれば確定したようなものだ。それを確信するとヴォイスは深く息を吐く。これまでの人生で記憶をなくすほど酒を飲んだのは初めてだったし、女を抱いたのも初めてだった。だというのにその記憶すらないのはヴォイスを物悲しい気分にするには充分だった。

ヴォイス自身は男であったし、そういうことにも興味はあった。

しかし、人口二千人ほどで高齢化の進んでいた故郷では若い人間と云うのは多くはなかった。その中ではとりわけ男の方が多く、ある年代の童貞達全員の卒業相手は一人の女だという噂すらあったし、もっと酷ければ家畜相手に初体験を済ました猛者もいたほどだ。だが、幸運にもヴォイスの年代は女の子に恵まれており、男の子よりも女の子の方が多く生まれた。だというのにヴォイスに機会が訪れることはなかった。その理由は女の子の家族が都会を夢見て村を出ていったり、同い年に無駄に女の子にモテる奴がいたこともあるが、ヴォイス自身がそういう対象を作ろうとしなかったことにある。モテるモテないは別にしていくら興味があろうとも村の娘に対してそういう行為や恋慕の感情を抱くなど当時のヴォイスにはありえなかった。理由は簡単だ。養父に迷惑がかかる。ただこの一言に尽きる。自分が何をするにしても、捨て子だから、化け物みたいな力を持っていてから、という言葉が付いてくるヴォイスからしたら悪

い噂へと昇華しやすい愛や恋というものは避けねばならない事象だったのだ。

だからこそ故郷を出て、自分が女を抱くことができる状況になった時は、そこらの都市の商売女を相手にせず、一度は殺した恋慕とという感情を抱いた女を相手にしようと思っていたはずなのだ。しかし結果は恋慕の感情どころか相手の顔すらわからず、また最中の記憶もない。

「まあ、やっちゃったもんは仕方ないか……女の子には悪いことしちゃったな」

相手の女性に対して悪いとは思いつつも、果して自分の初めての相手がどんな娘なのか想像を巡らせる。

記憶をなくすほどのアルコールを摂取していたヴォイスに正常な判断が出来たとは思えない。とすれば相手に自分の好みから真逆に離れたような娘である可能性がないこともない。今ヴォイスはまさにチキンレースに挑む勇敢かつ無謀な男のように女性が足以外にすっぽり被った布団を捲ろうとしている。

「せめて後悔しないレベルの人間であってほしいな」

布団を掴む前にヴォイスがボソリと呟く。覚えていない時点ですでに後悔していることは置いておいて、更なる後悔と言うかトラウマは生み出したくなかった。

「いねー」

意を決して布団を捲る。するとそこにいたのはヴォイス同様衣服を一切身につけていない女性の姿。

「……アリア？」

足同様シミのない綺麗な肌、胸元で豊かに育った双丘にくびれた腰。そして透き通るような水色の髪は間違いなく昨日であった蒼色の女戦士アリアであった。

「覚悟してたのとは別枠で後悔するなこれ……」

布団の中にいたアリアを見たヴォイスに浮かんだのは彼自身覚悟を決めていた好みの女の子ではないというものではなく、なぜ覚えていないのかというものだった。親切で正義感の強いアリアはヴォイスにとっても好ましいと思える女性だったからだ。

しかし、ヴォイスは少し悲しくもあった。なぜならヴォイス自身好ましく思っていたアリアという女性が、昨日初めて出逢った自分のような男に体を許してしまうほどに軽い女だったからだ。

(まあ、シヨックを受ける資格は自分にはねーか)

アリアが昨日初めて出逢った自分のような男に体を許してしまうほどに軽い女だと言うのなら、ヴォイスは昨日初めて出逢った女と関係を結んでしまうような軽い男だ。

「まあ、どうせなら堪能させてもらうか」

そう言って開き直るとヴォイスはアリアの身体を鑑賞する。寝ている相手に触れる勇氣がないヴォイスにとっては離れてアリアの身体を眺めることが唯一できることだった。

「なんか頭痛いのはどうでもよくなってきた……ん？」

頭痛を我慢してアリアの身体を鑑賞していたヴォイスはアリアの胸元から腹に残る大きな傷痕を目にし、そこに視線が固定される。

「これは刀傷か？」

女だてらに戦士として迷宮探索をしているアリアなのだから傷がないということはない。しかし、身体に大きく残るような傷を負いながらも迷宮に挑み続ける理由はなんなのだろうと思いつながらヴォイスはアリアの身体から目を離してそつと布団をかけてやる。そして自分はキッチンに行つて水を一杯飲むと辺りを搜索して発見した自分の衣服を見に纏つていく。

ヴォイスが服を着替え終えた頃、アリアが目を覚ました。

「……ん、頭いたーいつていつか股が痛いわ」

そう言いながらアリアが上半身を起こす。その動きのせいでヴォイスがせつかくかけた布団がはだけ、アリアの上半身があらわになる。

「おはよう」

それを横目にしながらヴォイスが声をかける。

「ん、おは……つて誰!？」

ヴォイスの声に反応しようとしたアリアは、それはもう見事なまでの二度見の後に自身に声をかけた者の姿を確かめる。

そしてヴォイスの姿を発見し、自分の格好に気づくと布団を引き上げて身体を隠す。そしてヴォイスを睨みつける。

「えーと……いい朝だな」

アリアの反応と視線に耐え切れなくなったヴォイスが窓の外を見ながら呟く。

「……………」

しかし、その呟きにアリアは応えることなく睨み続けている。その反応にヴォイスの背中に冷や汗が流れ出す。お互いというかヴォイスもそれ以上何を言っていないかわからず、無言の気まずい空気が場に流れる。

「夢じゃなかったみたいね……………」

無言の時を止めたのはアリアの呟きだった。しかし、その言葉は夢のような時間を過ごした乙女のセリフではなく、苦渋のような後悔の色に染まったものだった。

「とゆーか図々しくも人の部屋に居座ってんじゃないわよ。この、強姦魔っ！」

ヴォイスが失った記憶の中で何をしてしまったのかがその言葉に集約されていた。

「強姦魔だと？　つまり、その、自分は無理矢理君とアレしてしまっただのか？」

「何、しらばつくてんのよ！　嫌がるあたしを押しさえ付けて無理矢理したじゃない！」

憤るアリアの目が潤んでくる。それを見たヴォイスは一種のパニック状態に陥る。

「すまん……飲み過ぎたみたいで覚えていない、んだけど……」

ばつが悪く、顔を伏せてヴォイスが正直に告げる。そして言葉終わりにちらりとアリアの様子を見たヴォイスが見たものは怒りという次元を超えた般若の顔。今まで恐怖というものを感じたことのないヴォイスが初めて恐怖を覚えた。

「そう……覚えていない、か……ベロベロに酔ってたもんね……」

そう言いながらアリアは昨日のことを思い出していく。

まだこの都市にきたばかりだという男と知り合いになり、銀行に案内した後自分のオススメの店へと行ったときのことを

シックな店構えに完全個室、壁は防音でプライベートを守れ、料理も美味しく、酒も良いものが揃っている。アリアが案内したのはそんな店だった。今思えば、宿屋に併設された酒場とかならこんなことにはなつてなかっただろうが、後悔先に立たず。奢るとヴォイスに言われ、調子に乗って自分の知る美味しく値段もそこそこする一番お気に入りの店に連れていった。

ちなみに迷宮探索者のうち、中堅クラスの稼ぎを得るアリアが月に一回ほど行くような店である。

ヴォイスが初めて行った迷宮探索で得た金銭はおよそ六千^{ガル}Gであったが、これは初めてでかつヴォイスの迷宮探索時間にしては出来すぎな額である。だが、アリアくらいの探索者は一回の探索でヴォイスの稼いだ額の十倍以上は優に稼いで帰ってくる。

だから普通ならヴォイスのような迷宮都市にきたばかりで、迷宮探索者になって間もない者に奢らせるような店ではなかったが、銀行にお金を預けるところを後ろから見守っていたアリアはヴォイス

が意外と金持ちであることを知っていたので迷いはなかった。そのお金がグエンシティへと来る道中に倒した賊の装備や蓄えを強奪することで作り出したものだと知らずに……

それでその店に来た二人だったが、予想以上に話が盛り上がり、また店の味を気に入ったヴォイスが料理と酒を次々に注文しだした頃から物語の進む方向がおかしくなっていくことになる。アリアの制止も聞かず飲みつづけたヴォイスは受け答えも定かでないほどに酔っ払ってしまう。それに気づいたアリアが店を出ようとした時には手遅れだった。腕輪の機能は本人の意志がないと使えない。よって支払いはヴォイスではなく、アリアがする嵌めになった。アリアからすればヴォイスが馬鹿みたいに注文したおかげで予想外の出費だ。しかも酔ってまともに自分の宿もわからなくなっているヴォイスをお人よしと言えるアリアが置き去りにすることができるわけもなく、自身の寝泊まりする場に連れていくことにした。このアリアが寝泊まりする場とは長期滞在者に向けたマンスリーマンションのような物で、キッチンや風呂など一通りの設備が整っており、グエンシティではかなり人気の施設だ。家賃は月ごとに支払い、決められた日時までに次月の支払いのない場合は即刻退去させられてしまう。

自室にヴォイスを連れ込んでそこらにでも転がしておこうと思っていたアリアだったが、部屋に入ったところそれは起こった。

「……ここはどこだ？」

潰れていたヴォイスが目覚める。

「なんだ、起きたのか？」

「ああ」

ヴォイスの受け答えもはっきりしている。それならば自分の宿へ

と帰ってもらおうとアリアが促そうとした時、ヴォイスの目の焦点が合っていないことに気づく。

「酔ってないぞ」

「……自分の名前はわかるか？」

聞いてもいないことをヴォイスが言い出す。それを聞いて帰すのは危ないなと思ったアリアは確認の意味で質問する。

「子供に夢を与えるとのたまう存在は大人には何を与えてくれるのだろうか？ もしや絶望か」

「……ダメだこりゃ」

ヴォイスが完全に酔ったままだと判断したアリアは水を飲ませようとキッチンへと向かう。背後について来るヴォイスの存在は感じながらも特に気にしてはいなかった。

「きゃっ」

気付いた時にはアリアの身体はヴォイスに抱きしめられていた。

「いきなり何を……」

「いいからいいから」

そう言いながらヴォイスがアリアの甲冑を剥いでいく。

「手際が良すぎる！」

頭の中に三馬鹿の身ぐるみを剥いでいたヴォイスの姿が蘇る。あの時の手際も見事なものだった。おそらくは装備を剥ぐことに慣れ

てるんだろつなと思いながらもヴォイスの行動に必死で抵抗しようとするが、ヴォイスの力が予想外に強く、またどこをどうしたのか自分の力を発揮できない体勢にされ、ヴォイスはやりたい放題だ。

「や、やめろっ！」

「いいからいいから」

「良くないからやめろっ！」

既に身に纏っていた甲冑はない。少しでも重量を軽くするために甲冑の中は必要最低限のものしか身につけていないため、既にアリアは裸も同然の格好である。

「いいからいいから」

「おま、殺すぞっ！」

同じことしか言わなくなったヴォイスに怒りを増幅されながらもアリアは抵抗する術を封じられベッドに連れられてしまう。

「ホントに待ってくれ！ あたしははじ……」

「いいからっ！」

そう一言大きく威圧的に発したヴォイスは、突然の力強い言葉にビックリして半開きになったアリアの口をヴォイスは自身の口で塞ぐ。そこから行われた事は筆舌に尽くし難い。

「今思い出してもムカムカする」

不機嫌そうにアリアが呟く。その呟きを聞いたヴォイスの肩がビ

クリと震える。

「ご、ごめん……」

「覚えていないのに謝るんだ？」

「ごめん」

言い知れぬアリアの怒りを感じて、ヴォイスが謝り通す。許してもらえるかどうかは別にしてヴォイスに出来ることは謝ることしかない。

「とりあえずもぎ取るのとへし折るのどっちがいい？」

笑顔を見せながらアリアが言うが、その目が笑っていないのは明らかだ。

「本当に申し訳ない。お詫びになんでもします」

膝を床について頭をさげる。何かアリアからの反応があるまでヴォイスは頭を上げるつもりはなかった。

「なんでもって……だったらもぎ取る」

「それ以外でお願いします……」

男の証をもぎ取られることだけは避けたかったヴォイスは図々しいとは思いつつもアリアに願ひ出る。その言葉は切実な響きで満たされていた。

「とゆーかそもそも奢るとか言って結局あたしが払ったし……」

「重ね重ね申し訳ない」

「だからっってお金で解決するものでもないし……そうだ、身投げし

る」

「出来ればそういう感じのものも避ける方向で……それ以外ならなんでも」

ヴォイスの物言いにアリアが呆れる。自分にあれだけのことをしておいて血を流さずに解決しようとするヴォイスに更なる怒りが込み上げた。

すると不意に昨夜の行為の最中のことを思い出す。

アリアにはコンプレックスがあった。それは胸元から腹に走る大きな傷の存在。自身の容姿に多少の自信はあったが、この傷が出来たことでアリアは女というものを捨てた……はずだった。こんな傷のある女に欲情する男などいない。そう思っていたアリアであったが、傷を見たヴォイスは

「傷くらいでお前の魅力は変わらない。ま、いいからいいから」

と言いきった。いいから発言には正直ぶん殴ろうと思ったアリアであったが、ヴォイスの言葉に何か見えない糸に縛られていたものが断ち切られて自由になった気分になった。以降はヴォイスの行為を消極的にはあるが受け入れてしまうようになっていた。

それを思い出して顔を赤くするアリア。頭を下げつつづけているためヴォイスからはアリアの顔を伺うことは出来ない。そのことに内心安堵しながらもヴォイスをどうするべきか考えはじめた。

何も罰を与えずに許すには度し難く、だからと言って与えるべき罰を考えるのは難しかった。

「……決めた」

アリアのそんな声が聞こえ、ヴォイスは顔を上げてアリアの顔を見る。

「あんだ、あたしの奴隷になりなさい」

そう言ったアリアの顔には悪戯を考えついた子供のような表情が浮かんでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4024t/>

You are fucking guy !

2011年5月25日09時41分発行